



約3年ぶり、ボランティア「ほほえみ」笑顔で再会

シリーズ こころの散歩道 vol.30

マルトリートメント

4月になって新年度が始まりました。職場では異動があり、学校ではクラス替えや新しい先生との出会いがこの季節の風景でしょうか。先日、いばらき発達障害研究会で、東京都立矢口特別支援学校の川上康則先生による「教室マルトリートメント」についての講演を聴きました。同名の本も出版されています（東洋館出版社）。

「教室マルトリートメント」とは川上先生の造語で、「教育現場における指導者による不適切なかかわりや本来であれば避けるべきかかわり」という意味です。マルトリートメント（mal=不適切な、treatment=かかわり）は、欧米では日本でいう虐待に加え、大人から子どもへの発達を阻害するような行為全般を含んでいます。

体罰などの違法行為は報道もされていましたが、子どもの心を知らないうちに傷つけるような適切でない指導については、これまで取り上げられていませんでした。たとえば、ほめるべき時にほめない、子どもになめられないように笑顔を見せない、マイナス面を指摘する指導などです。ひどい場合は子どもの心にトラウマ（心的外傷）をつくるともいわれます。実際、私が外来で診ている患者さんの中にも、先生の行き過ぎた指導によると思われる、傷ついてフラッシュバックを経験している人がいます。

学校の先生たちも、間違いを許容しほめて伸ばすのか、叱って規律を守らせるのか教育方針が対立するそうです。職員室の中が険悪で、多忙で気持ちに余裕がないと、子どもたちに笑顔を見せられません。職員室内が温かい空気でお互いを尊重し合う対話があることがマルトリートメントを予防する鍵だそうです。また、特別支援教育の基本は「他者との違いを認め、相手をリスペクトする」です。これも教員間でできなければ、子どもに対して到底行えません。そして、子どもとラポール（信頼関係）を築くことも重要です。そのために、相手の伝えたいことをキャッチし、相手が伝えたかったことを言葉にして返してあげること続けていきます。マルトリートメントの対義語は「グッド・コミュニケーション」だそうです。

このお話は、学校での問題として説明されているのですが、家庭での子育てや、介護や医療の現場にも当てはまる課題です。同僚も含め相手をリスペクトすることや、ラポールの形成が重要ということも全く同じだと思います。

茨城県立こころの医療センター病院長 堀 孝文

子どものトラウマ



トラウマとは、災害や虐待など衝撃的な出来事によって生じる「こころのケガ」です。大人とは違う点もある、子どものトラウマについて松本先生にお話をうかがいました。

Q1 子どものトラウマが気づかれにくいのはなぜ？

子どもは発達途中にあり、出来事の受け止め方が年齢によって大きくかわります。そのため、トラウマの影響の現れ方も様々です。暴力、非行、自傷などの問題行動として表れたり、遊びの中で表現されることもあります。さらに、子どもは何があったかを話すことが少ないため、トラウマに気づかれにくいのです。

Q2 トラウマに気づくためにはどうしたらよい？

トラウマインフォームドケアという考え方があります。これは、子どもの困った行動の裏にトラウマの影響が隠れていないか考えながら物事を見ることを言います。それによって、見えにくいトラウマが「見える化」され、子どもの行動や症状がトラウマの影響であることに気づき、同じようなトラウマ体験が繰り返されることを防ぐことができます。

Q3 トラウマに気がついたらできること

トラウマや、耐えがたい出来事による影響から回復していく力や道のりのことをレジリエンスといいます。レジリエンスには、ユーモアやまじめさなどの本人の力と、支えてくれる家族や友人、先生、安心できる場所などの環境が影響しあいます。安全・安心な環境をととのえ、個人の強みを伸ばす手伝いを続けることでレジリエンスは強化され、子どもの回復を支えるでしょう。

『パーソンセンタードなケアへの旅路』

～児童思春期病棟でのケア～

パーソンセンタードな
ケアってなあに？



そこにいるすべての人が尊重され、対等な立場で共同していくことです。

パーソンセンタードなケアは色々な捉え方があるので、そのひとつとなります。

思春期の特徴

思春期は、周囲の影響を受けながら子どもから大人へと心と身体が大きく成長し、一人の大人へ向けて自分を確立する時期です。親からの自立と依存の間で揺れる時期なので、周囲の大人は、その揺れを社会生活に支障がないように支援することが役割になります。

入院してくる子どもの特徴

入院してくる子どもの多くは、家族関係や学校での過ごし方などでうまく馴染めない経験をしています。傷ついた体験が多い子ほど、自分に自信がなく他者を信用できなくなってしまう傾向にあります。

また、障害の特性で感情のコントロールが難しい子、自分の気持ちを上手に伝えることが苦手な子のなかには、自己表現の結果として危険な行動に至ってしまうこともあります。

関わりの工夫

入院してきた子どもたちのなかには、家族とはじめて離れる経験をする子もいます。程度の差はありますが、皆戸惑いや不安があります。子どもたちに、病院は怖い場所ではなく、安心安全な居場所であると思ってもらえるように、気持ちに寄り添い、関心を寄せ、感情を丁寧に扱うことを大切にしています。また、自宅で愛用しているぬいぐるみなど、安心できるグッズを使ってもらうこともあります。

自己表現の結果として危険な行動に至ってしまったときは、行動そのものに焦点を合わせるのではなく、そこに至った理由に焦点を合わせて、別な形で表現ができるようにサポートをしています。危険な行動をしなくて済むような環境を提供し、その子の良い所を伸ばしながら、お互いに理解しあうことで、安心を作り穏やかな生活につなげています。

児童思春期病棟ならではの取り組みとして、すべての子に[入院時面接]を実施しています。面接を通して好きなことを見つけ、関わりのきっかけとしたり、ストレスとなることや今まで効果のあったストレス対処法を、本人とスタッフで共有し入院中の支援に活かしています。

人間関係や考え方の癖など、その子が抱える課題に対し、多職種での関わりを通し“こうすればもっとうまくいくんだ”という成功体験を積み重ね、退院後の生活に自信を持てるようにサポートしています。



CVPPP（包括的暴力防止プログラム）推進委員会：中山・羽石

イラスト：鴻田

スムーズな連携のために

令和5年3月2日に第25回精神科ネットワーク実務者会議を25名の方にご参加いただき開催しました。

今回のテーマは「スムーズな連携のために総合病院について知ろう」のもと「笠間市立病院」「石岡第一病院」「つくばセントラル病院」より発表いただきました。

各医療機関の取り組みや普段の業務では把握することのできない施設の特徴について共有することができ、「連携をしていく上で相手先を知ることの大切さを再認識する機会となった」との意見が多く寄せられました。

今後患者様によりよい治療環境や支援の提供へ還元していくことに繋ぐ大変有意義な時間を皆様と過ごすことができました。



(お知らせ) 電話設備の機能追加について

当院では令和5年2月12日から利便性及び電話対応の品質向上等を目的に、自動音声メッセージとともに電話録音機能を追加しました。

当院からの発信、当院への着信の両方で録音されますので、ご理解いただきますようお願いいたします。



精神科ネットワーク連携医療機関紹介

医療法人社団有朋会 栗田病院



異なる医療機関・施設間が連携をとることで、患者さんの症状に対する適切な医療提供を行えるようにネットワークを図り、包括的な連携支援体制を構築しております

栗田病院は、昭和42年の開設以降、患者様やご利用者様、ご家族様の「こころ」に温かな灯りをともしくことを使命とし、その実現のため、次の3つの柱を中心に取り組んで参りました。

- 精神科急性期医療～茨城県初の精神科急性期治療病棟の開設～
 - 社会復帰支援～退院から地域生活支援までサポート～
 - 認知症ケア～地域の認知症医療基幹病院としての役割を担う～
- 近年では、地域のニーズに応えるため「アルコール依存症治療」「若年性認知症支援」「周産期メンタルヘルス」など、各種専門医療にも力を入れています。

ホームページはこちら！！

〒311-0117

茨城県那珂市豊喰505

医療法人社団有朋会 栗田病院

TEL : 029-298-0175 FAX : 029-298-0812



診療時間	月	火	水	木	金	土
9:00～12:45	○	○	○	○	○	○
13:30～17:00	○	○	○	○	○	—

*精神科外来は完全予約制です

茨城県立こころの医療センター広報紙 第72号 発行：こころの医療センター広報委員会 発行者：堀 孝文
発行日：令和5年4月1日 〒309-1717 茨城県笠間市旭町654 TEL : 0296-77-1151 FAX : 0296-77-1739